

## 絵本を一冊まるごとウォッチング

石井 光恵

絵本は、手にとってはじめてみる表表紙から、読み終わって閉じた裏表紙まで、すべてまとめて一つの作品として完結するものです。本の大きさ、厚さ、重さ、形、紙の手触り、絵本の綴じ方（綴じない絵本もあります）、絵本の開き方まで含めて、まるまる一冊すべてが絵本の表現といえます。また、一見何の変哲もない形の絵本でも、絵本づくりでは絵本のさまざまな部位に多彩な遊びや工夫が凝らされ、それらが有機的にデザインされていきます。絵本を一冊まるごとウォッチングしてみましょう。見過ごされがちなところに、目を向けてみると、絵本の違った面白さが見えてきます。それぞれに「こんな絵本があります」という一例をあげておきます。

### 1. 絵本の大きさ、厚さ、重さ、形、紙の手触り、絵本の綴じ方、開き方、めくり

#### 1) 絵本の大きさ

絵本は大きさも、大小さまざまです。赤ちゃん絵本には、小型のものが多くあります。赤ちゃんの目が追える範囲や、小さな手や体が考慮されているのでしょう。一方とてつもなく大きな絵本というものもあります。ビッグブックといって、多くの人数に一度に読むとき用に、拡大されたものもありますが、それとは違って、もともと大きなサイズで作られたものもあります。

- ・小型の絵本 『ピーターラビットのおはなし』ビアトリクス・ポター作、いしいももこ訳、福音館書店 1971 (*The tale of Peter Rabbit*, 1902)
- ・大型の絵本 『えんそく』片山健作、架空社、1994  
『くまさん』レイモンド・ブリッグズ作、角野栄子訳、小学館、1994  
(*The bear*, 1994)
- ・一般的なサイズの絵本
- ・ビッグブック 『はらぺこあおむし』エリック・カール作、もりひさし訳、偕成社、1994 (*The Very Hungry Caterpillar*, 1969)
- ・豆絵本・豆本 『ばたばたぼん のびるのびる豆絵本』長新太他、福音館書店、1994  
『みぎのほん ひだりのほん』(ふたごえほん) 五味太郎作、絵本館、1996

#### 2) 絵本の形

形もまたさまざまです。内容にあった本の形が自由に選択されるのも絵本の特徴です。最近、絵本にしかけることが多くなって来ていますので、特殊な形も目立ちます。昔は、「こどものとも」を縦から横長の判にただけで、書棚に並べにくいというので書店から苦情が来たということでしたが、いまはそれも笑い話です。

- ・真四角な絵本 『ちいさなうさこちゃん』ディック・ブルーナ作、いしいももこ訳、福音館

書店、1964 (*Nijntje*, 1955)

- ・丸い絵本 『あかちゃん』 tupera tupera 作、ブロンズ新社、2016
- ・横長の絵本 『ほしのひかったそのぼんに』 わだよしおみ文、つかさおさむ絵、こぐま社、1966
- ・縦長の絵本 『つきのぼうや』 イブ・スパング・オルセン作、やまのうちきよこ訳、福音館書店、1975 (*Drengen i Månen*, 1962)
- ・特殊な形をした絵本 『パンのおうさま』 えぐちりか作、小学館、2014  
『ちいさなみどりのかえるさん』 フランセス・バリー作、たにゆき訳、大日本絵画、2008 (*Little green frogs*, 2008)

### 3) 絵本の厚さ

絵本は、厚さもまたまちまちです。ページ数が多かったり、使用されている紙が厚かったりですが、本の厚さというのも、絵本がモノであることを主張しています。

- ・厚い絵本 『らくがき絵本』 五味太郎作、ブロンズ新社、1990
- ・薄い絵本 『日のがのぼるとき』 駒形克己、One Stroke、2015

### 4) 絵本の重さ

絵本の大きさや、厚さ、使用されている紙、本が作られている素材などでも、重さは違ってきます。絵本の重さは、いろいろです。でも、しっかりと絵本には重さがあります。

- ・重い絵本
- ・軽い絵本

### 5) 紙の手触り

使用されている紙質によって、当然ながら絵本の手触りがいろいろと違ってきます。そのことにこだわる作家たちも出てくるようになり、グラフィック的な探求もさることながら、よりよい表現を求めての探求が紙の手触りにも及んでいます。ブルーノ・ムナーリや駒形克己は、絵本の紙質にこだわります。紙質によっても、絵本の印象はかなり変わります。もちろん読者に与える、触感としての印象もだいぶ違います。

- ・『ぼく、うまれるよ!』 駒形克己作、One Stroke、1995 (初版) と改訂版 1999 の違いに注目
- ・『きりのなかのサーカス』ブルーノ・ムナーリ作、八木田宜子訳、好学社、1981 (*Nella nebbia di Milano*, 1968)

### 6) 絵本の綴じ方

本は綴じてあることをもって、本とする。と、というのが常識でしたが、その綴じ方というのも、絵本はさまざまです。構造上のこともありますが、表現上からも綴じ方にこだわりを持つことがあります。箱で綴じるとは、聞き慣れないことばです (私が今回考えました) が、ある枚数のものを箱に入れて、本としてのまとまりを示すという形の絵本のことです。おもちゃとのはざまで

葛藤もあるようです。

- ・リングで綴じる
- ・糸で綴じる
- ・糊で綴じる
- ・箱で綴じる

## 7) 綴じない絵本

あえて綴じないことを表現としたいという絵本もあります。多くはしかけ絵本というジャンルで括られていますが、現在はこのようなものが増えています。カード式の絵本などは、1990年代には画期的なものでした。これも絵本？というのが、一般の反応だったように思います。

- ・絵巻式 歴史的に古いものに、多く見られる形態ですが、現在では印刷の制限もあって、この表現を使用したいものは、蛇腹式の形態を多く取るようです。
- ・カード式 「Little eyes」シリーズ、駒形克己作、偕成社、1990～1992  
これは、「箱で綴じる」に入るものですが、1枚1枚は綴じないということで...
- ・蛇腹式 『絵巻えほん びっくり水族館』長新太作、こぐま社、改訂版、2005
- ・スパイラルに折ったたんで『くまさんどこかな?』タカハシカオリ作、河出書房新社、2015  
『土のなかには』駒形克己作、偕成社、1993
- ・一枚絵で 『うらしまたろう』藤本真央作、青幻舎、2016

## 8) 絵本の開き方

欧米の絵本の場合には、右開きの絵本はありません。日本のように文字を縦に綴って文章にする国のものです。最近では、日本でも横書きにして、左開きのものの方が多くなっています。横に開くばかりでなく、縦に開いてもよいではないか。高さを表現するには縦に開いて、縦に長い空間を出現させたいというようなことや、縦に開くことによって、読者が登る感覚や、降りる（下へ潜る）感覚を味わうことが可能だとすることで、縦開きなども出ています。やはり広い空間の表現のために、途中に観音開きのページを入れることもあります。

- ・横開き（右開き、左開き）
- ・縦開き（上から下へ、下から上へ）『100 かいたてのいえ』いわいとしお作、偕成社、2008  
『きょうのおやつは』わたなべちなつ作、福音館書店、2014
- ・観音開き 『パパ、お月さまとって!』エリック・カール作、もりひさし訳、偕成社、1986  
(*Papa, please get the moon for me*, 1986)

## 9) “めくり”の工夫

絵本において「めくる」ということは、絵本というものの本質を示すことでさえあります。したがって、どの絵本にも「めくる」ということは意識されており、さまざまな工夫がなされています。長新太が『ちへいせんのみえるところ』（ビリケン出版、1998）\*で試みた「でました」とことばがあって、次のページに絵としてモノが出てくる形などが、「絵本をめくる」ことの端的な意味なのでしょう。めくることによって、次のページに変化が生まれる、それが絵本です。下記には、特に変化の大きいものをあげてみました。また勢いをつけためくりで絵本を読む、フリ

ップブック（パラパラまんがとよくいわれますが、絵本の一つとしても考えられています）などもめくるということでは、面白いものです。

- ・『いないいないばあ』松谷みよ子文、瀬川康男絵、童心社、1967
- ・『のりものつみき』よねづゆうすけ作、講談社、2011
- ・『へんなおでん』はらぺこめがね作、グラフィック社、2015
- ・フリップブックのいろいろ

\* ビリケン出版の『ちへいせんのみえるところ』はエイプリール・ミュージック（1978）の複製

## 2. 絵本の各部位の遊びから

主な部位の工夫と遊びを下記の 8 つに分類してみました。

- |                |                    |
|----------------|--------------------|
| 1) カバー（ジャケット）  | 5) 扉（とびら）          |
| 2) 表紙（表表紙と裏表紙） | 6) のど（本のつなぎ目）を利用して |
| 3) 見返し         | 7) 奥付（おくづけ）        |
| 4) 遊紙の挿入       | 8) 帯のコピー（広告文・宣伝文句） |

これら部位での遊びや工夫には、物語世界への導入や読者に誘いかけをする働きがあり、テーマや話の内容をアピールしつつ、インパクトを強く感じさせる効果もあります。デザインは知的な計算がその基盤にあり、遊ぶ楽しさ、愉快さ、面白さ、驚き、美しさなどもろもろの感情を読者に引き起こさせるものが込められています。それらが、絵本というものを印象深いものになっているのです。

### 1) カバー（ジャケット）の遊びと工夫

絵本には、カバー（ジャケット）の全くないものもありますが、多くの場合はついています。そのカバー（ジャケット）も、本を保護するという意味から離れて、オシャレに演出されることがあります。遊び心に富んだカバーを紹介します。

- ・『ちずのえほん』サラ・ファネリ作、ほむらひろし訳、フレーベル館、1996 (*My map book*, 1995)
- ・『マドレンカ』ピーター・シス作、松田素子訳、BL 出版、2001 (*Madlenka*, 2000)
- ・『わにのなみだ』アンドレ・フランソワ作、いわやくにお訳、ほるぷ出版、1979 (*Les Larmes de Crocodile*, 1955, 1967)
- ・『しろねこくろねこ』きくちちき作、学研教育出版、2012

### 2) 表紙の遊びと工夫

表紙は絵本の顔なので、絵本を作る人々にとってはインパクトがあつて、内容をある程度示せ

て...と楽しい悩ましさに溢れた部位なのではないでしょうか。

- ・『アンジュール』ガブリエル・バンサン作、BL 出版、1986 (*Un jour, un chien*, 1982)
- ・『こすずめのぼうけん』ルース・エインワース文、堀内誠一絵、福音館書店、1977 (こどものとも傑作集) (“The sparrow who flew too far,” *Ruth Ainsworth's Listen with Mother Tales*, 1951)
- ・『はじめてのおつかい』林明子作、福音館書店、1977 (こどものとも傑作集)

### 3) 見返しの遊びと工夫

見返しは、本を丈夫にするために構造上なくてはならないものですが、そこを使ってさまざまな遊びが展開されます。シンプルなものから凝ったものまで、多種多様です。デザイナーの腕の見せ所といった感もあります。また、色彩にもこだわりが見られます。

- ・『本の子』オリヴァー・ジェファーズ&サム・ウィンストン作、柴田元幸訳、ポプラ社、2017 (*A child of books*, 2016)
- ・『かもさんおとおり』ロバート・マックロスキー作、わたなべしげお訳、福音館書店、1965 (*Make way for ducklings*, 1941)
- ・『星の使者』ピーター・シス作、原田勝訳、徳間書店、1997 (*Starry messenger*, 1996)
- ・『イヌのすべて』サーラ・ファネッリ作、掛川恭子訳、岩波書店、1998 (*A dog's life*, 1998)
- ・『はせがわくんきらいや』長谷川集平作、ブッキング、2003 (初版 1976)
- ・『Lines』Suzy Lee、Chronicle Books、2017

### 4) 扉(とびら)の遊びと工夫

表紙が絵本の顔なら、扉は絵本の入り口(正面玄関でしょうか)です。「さあ始まるぞ」という緊張感のある扉のデザインが展開されます。単に題名が描いてあるページというだけのものではないのです。

- ・『ひとあしひとあし なんでもはかれるしゃくとりむしのはなし』レオ・レオニ作、谷川俊太郎訳、好学社、1975 (*Inch by inch*, 1960)
- ・『ガンピーさんのふなあそび』ジョン・バーニンガム作、みつよしなつや訳、ほるぷ出版、1976 (*Mr Gumpy's outing*, 1970)

### 5) 遊紙を挿入して

絵本を丈夫にする構造上の問題だけでしたら、見返しがあればすむのですが、オシャレに扉までの間に何枚かページを挟む場合があります。装飾や絵本の表現の一つです。

- ・『おかあさん』シャーロット・ゾロトウ文、アニタ・ローベル絵、みらいなな訳、童話屋、1993 (*This quiet lady*, 1992)
- ・『月光公園』宙野素子文、東逸子絵、三起商行、1993

### 6) のどを利用して

従来絵本の「のど」と呼ばれる部分は、じゃま者、嫌われ者でした。本を綴じるとどうしてもできてしまう部分です。絵本では、見開きの大画面を真ん中で切ってしまいかねない嫌な部分でもありました。ところが、近年「のど」の動き（のどはパタパタと動きます）を利用して絵本に動きを出現させたり、「のど」を見えない世界への通路としたりと、そこを逆手にとって絵本を展開するものが出てきました。2000 年を過ぎての新しい試みかと思います。

- ・『こころの家』キム ヒギョン文、イヴォナ・フミエレフスカ絵、かみやにじ訳、岩波書店、2012 (『마음의 집』2010)
- ・『オニオンの大脱出』サラ・ファネリ作、みごなごみ訳、ファイドン、2012 (*The Onion's Great Escape*, 2011)
- ・『なみ』スージー・リー作、講談社 2009 (*Wave*, 2008)
- ・『いたずらえほんがたべちゃった!』リチャード・バーン作、林木林訳、ブロンズ新社、2016 (*This book just ate my dog!*, 2014)

#### 7) 奥付の記載いろいろ

忘れられがちなのが、この「奥付」です。絵本の戸籍のようなもので、無くてはならないものです。奥付を記すデザインもいろいろで、絵本の邪魔にならないように密かに美しくデザインされています。子どもは全く気にしませんし、大学生も言わないと見過ごします。

#### 8) 帯の幅の遊びと工夫+広告文(コピー)の妙

帯は、買い手の目につくようにする広告の一種です。広告ですから、そこは買ってもらえるかどうかの大切な部分です。帯に付けられるコピーは、単刀直入にして魅力的にと頭がよく絞られていて、その的確な表現に感心しますし、また愉快地楽しめます。絵本本体の邪魔にならないように、そして目立つようにと、帯の幅や絵本へのかけ方なども含め、あの手この手で工夫されています。もちろん、図書館では除かれてしまいます。

- ・『りんごかもしれない』ヨシタケシンスケ作、ブロンズ新社、2013
- ・『アンリくん、パリへ行く』レオノール・クライン文、ソール・バス絵、松浦弥太郎訳、P ヴァイン・ブックス、2012 (*HENRI'S WALK TO PARIS*, 1962)

#### まとめ

こうして絵本の構造を起点にウォッチングしてみただけでも、絵本には表現媒体としての可能性がさまざまにあります。その広範な可能性が、作家も読者も共に多くの人々を魅了してやまないのでしょうか。そこに今日の絵本発展の鍵があるのかもしれませんが。